

月と愛の彫刻家 田中等

園長 児嶋 草次郎

高鍋駅前に巨大な石像が出現しました。高さは3m近く、幅は4m近く。石像と言え、お墓かお地藏さんかしか触れたことのない者にとっては、圧倒される大きさです。辺鄙（へんぴ）な田舎の古い駅舎に下り立った旅人は、この石像を見て何を感じ思うのでしょうか。

餃子の町日本一を祝って、あるいは願って作ったモニュメントなのか。まさかそれにしても巨大すぎる。みかげ石のようだし、お金も相当かかっている。『歴史と文教の城下町』というプライドを持つ高鍋町民が、そんな生活次元の記念碑の設置を許すはずはないだろう。

駅の東側に立つ石井十次生誕の地の記念碑に関連するものなのか。そうかもしれない。

二つの半月が、欠けた方を背にして向き合い、縄（帯）のようなもので結ばれている。石井十次7歳の頃のエピソード『縄の帯』を、象徴的に形にしたものに違いない。左の月が右の月に少し寄りかかっているように見えるので、右が石井十次少年で左が友人のマッチャンだろう。

母親の手織りの真新しい帯と、いじめられている貧乏人のマッチャンの縄の帯とを交換したという、有名な石井十次少年時代の美しい話だ。

「人」という字は人間が互いに支え合っている象形文字から来ていると聞いたことがあるけど、『縄の帯』のエピソードをもとに、「人と人が支え合う高鍋町」をコンセプトとして何らかの宣言をして、その象徴として建てたのだろう。二つの石像の向き合う丸味と、微妙なもたれあいの距離感とが、何とも言えないあたたかさをももたせて出している。

そう感じながら、旅人がその抽象彫刻に近づき下の銘板に目をやると、制作田中等と刻まれている。題は『MOON DANCE』。なるほど、月のダンスか。形としてはそのようにも見えるけど、ほんとうの願いは、「人と人との支え合い」にあるように見える。

銘板の「建立趣意」として書かれている文を追っていくと、次のような言葉がその建立への思いを伝えている。

「人と人との結びつき、愛と信頼の大切さを表現している。」「その姿は、慈愛の心を育み、「観る者に勇気と希望を与え」る。

なるほど、支え合い、共生の町高鍋なのだ。江戸時代の藩主秋月種茂の時代より、地下水脈のごとく永々と続く精神文化・福祉文化の復興のノロシとなるシンボルとして、コロナからの解放のこの時、渾身の力を込めて制作し、設置したのだろう。ロシア・ウクライナ戦争へのアンチテーゼとして主張しているようにも見える。これは歴史的な傑作だ。旅人はそう感じることでしょ。

彫刻家の田中等氏は、私の高鍋高校時代の友人ですが、今回は君ではなく氏と呼ばさせていただきます。世界的な彫刻家田中等氏が1年かけて高鍋町内で制作した巨大彫刻が完成し、高鍋駅前のロータリーに設置されました。私はその存在感に圧倒され、いつも静かに振るまう彼の秘めた熱情的なエネルギーに恐れをなしています。40年50年、世界各地で彫刻を作り現地に建立して来た彼の集大成と言える作品なのかもしれません。宮沢賢治じゃないけど、雨の日も風の日も、修行者のごとくただひたすら20tの

巨石に1年間いどみ続けた70歳を過ぎた彼のエネルギーはどこから湧きあがってくるのでしょうか。

5月21日(日)、夕方より約40名が集まってこの石像の落成祝賀会が開かれ、同級生として私もその会に加えていただきました。

私は次のようにお祝いを述べさせていただきました。(割愛したところも掲載します)。

我々の福祉の世界においてもそうなのですが、今どんな小さな分野においても、グローバリゼーションが叫ばれています。しかし、世界各地のそれぞれの自然風土の中で長い時間をかけて培われて来た文化は、そんなに簡単にグローバル化できるものではありません。その独自の文化の中で強引なグローバル化を求めたりすると、紛争がおきたり戦争が始まったりします。文化にはグローバル化できない部分もあります。だから互いにその違いを尊重し合わなければなりません。今起きているロシア・ウクライナ戦争も関係ある出来事だと思います。

しかし、芸術は、いきなり異文化の中に入ったとしても、一挙にその文化の違いを超越していきます。そこが文化と芸術との違いです。

田中等氏の彫刻は、世界各地にあります。アメリカ、カナダ、フランスにあることについては、文化交流もありますので日本人としてあまり違和感も感じませんが、文化的にはすぐにはなじめそうにもないウクライナ、ロシア、中国、そしてトルコ、インド、さらにはイスラムの世界であるドバイ、エジプトにもあるのです。これは何を意味するのか。

文化を超越したところに田中氏の作品の神髄があるというだと思います。田中氏が勝手に作って強引にそこに建立して来たわけではないのです。世界各地のコンペに入賞したからこそ、現地での作品の制作が許されたわけで、選んだのは、現地の人々なのです。世界各地の人々の感性と共鳴し合わなければ選ばれるはずもありません。そこがすごいのです。

田中氏の彫刻の魅力の原点は何でしょうか。それは歌人の伊藤一彦氏との著書『月の雫』の中で、伊藤氏がいみじくも指摘してくださっているのですが、『まぐはい』ではないかと思います。人類が存続していくための神聖ないとなみです。その『まぐはい』がなければ、人類は当然絶滅します。「まぐはい」後、女性は妊娠し、子供が生まれます。女性は母親となり、自分の心と肉体のすべてをかけて我が子を育てます。

田中氏の彫刻作品はある時から変わりました。それは、石井記念友愛社のアンジェラスの森で作品を作り始めてからです。私は、石井十次の魂の一部が乗り移ったと解釈しました。もしかしたら、「アンジェラス」という言葉から、聖母マリアの受胎をイメージされる人もおられるかもしれません。

そのことを御本人はあまり意識されてないと思いますが、私には、田中氏の作品の全体からなんとなく母性が感じられるのです。母性がかもしだすやわらかさ、あたたかさをその石像に感じてしまうのです。だから、何となく近よって触りたくなります。子供たちが田中氏の作品に近寄っていくのは、本能的にその誘引力を感じ取っているのでしょうか。

さて、皆様に一つの提案をさせていただきます。田中等彫刻公園を作りませんか。子供たちが触れることのできる作品を何点か並べるのです。私は、高鍋町の明倫文化が生み出した世界に通用する一つの芸術だと思っています。宮崎県とか日本という狭い範疇(はんちゆう)ではない。世界にアピールできる芸術品だと思っています。その原点がこの地にある。世界中から旅人が訪れるようになるかもしれません。まさにコロナ後の文芸復興です。

田中等氏の今までの世界的な挑戦を町民がしっかり受け止めて、一つの顕彰の形にして、次世代に伝えていく。また子供たちの感性を育てていく。そのことこそが文教政策だと思います。

彫刻公園の場所は、石井記念明倫保育園(旧町立南町保育園)の跡地です。今年度、石井記念明倫保

育園は隣の旧黒木清五郎邸の宅地内に移転改築の予定です。このあたりは、城跡・藩校明倫堂跡や現在の町立美術館、図書館にも近く、明倫文化発祥の地といってもよい。皆さんの一人ひとりの力の和ができれば、すぐに実現できると思います。よろしくお願い致します。

今、その祝賀会から2週間ほどが過ぎ去っています。その後の情報によりますと、ある方がNPO法人高鍋町観光協会に千万単位の寄付をされ、その資金をもとに田中等氏に依頼して制作したとか。

これはモニュメントだからこれほど大きくなったけど、子供たちが触れ親しむものであれば、一体500万円~300万円くらいでできるのではないかと勝手に考えています。公園内には5点前後あれば充分でしょう。地元の有力企業に一点ずつの寄付をお願いして、同じ方式で制作を依頼していったらと思います。田中氏の年齢を考えると急がねばなりません。

ところで、その後私の想念の中に湧きあがって来た一つのイメージです。石井記念友愛社のアンジェラスの森で制作するようになってその作品の姿が変わったと先ほど書きましたが、もしかしたら、その森の中で日々無心になって石を刻んでいるうちに、彼の中の今まで眠っていたDNAが目覚めたのではないかという思いです。それは、縄文時代の情念。人間の魂の奥深い所に抵触する部分になるので、文化を越えて人々の魂と共鳴し合うことができるのではないか。高鍋大師の稚拙ではあるけど土俗的石像群や、情動の画家道北昭介の赤の世界と何か同じ情念が流れているようにも感じ取れます。外洋にこぎ出していくことを常に夢見ながら、大木を石の斧で少しずつ少しずつくり抜いていく縄文の大工のような感覚で、彼は石を彫っていったのではないか。20tの巨石に、一人で大真面目に向き合える感覚が、私たち素人には想像できないのです。

私はふと彼を青森の三内丸山遺跡につれて行って、数々の土偶と対面させてみたいとも思ったりしています（失礼！）。底なしのそのエネルギーの中に土偶的な感性がその出番を待ち構えているのではないか。その部分を引き出すことができれば、その彫刻公園は一つの聖地になり得る。子供たちにとっても、家族にとっても、魂の癒しの場になり得るでしょう。彼は「高鍋町の持田古墳群が自分の原点だ」と言われたことがあります。私に言わせれば、もっと深い。

宗教が始まる前の祈りの聖地。青森県が生み出した版画家棟方志功の描く女性像のように、豊満で母親的な曲線の描く物体が祭神であった気の遠くなるような昔の話。だからこそ、人々の魂が呼び寄せられていく。田中等氏個人がどうのこうのではなく、コロナや戦争からの復興を祈る祭司としての宿命を、彼は背負わされようとしているのではないか。ルネッサンスの呪術師一。

話がどんどん迷路に入っていきますので、もどします。

「結びつき」・「愛と信頼」・「慈愛の心」・「勇気と希望」。銘板に書かれていたこれらの言葉がキーワードです。それに「支え合いと共生」を加えたものが、その彫刻公園のテーマです。田中等氏の作った彫刻群が祭神となり、人々の魂の中からそれらの心と呼び覚ますのです。

先ほども書きましたように、私たちは今年度「だれ一人取り残さない大家族的・福祉文化的共生の町・地域社会づくり」をコンセプトとする「友愛の森」―共生と集約の未来型プロジェクト―に取り組みます。具体的には、石井記念明倫保育園（旧南町保育所）の改築に合わせて、保育園、小規模児童養護施設、障がい者通所施設との複合・共生施設化をめざすのです。田中等彫刻公園はその保育園の跡地を利用して作ろうとする企画です。土地の所有者は町ですので、何度も町に提案していますが、町側の腰は重いものです。これが実現すれば、長年の夢であった、福祉と芸術との融合が実現するのです。跡地利用については、通り抜け道路や、シェアハウス等も提案していますが、行政の方々は、できない理由をまず考えられるようです。町にとっても一つのチャンス。支援者の皆様バックアップをよろしくお願い致します。

